この映画館に行きたい！

～シネクイントの巻～

連載5回目の「この映画館に行き隊」は渋谷でミニシアターの歴史を築き上げた「シネクイント」に潜入してきました！支配人・斉藤氏のインタビューも掲載！

6月某日。渋谷駅から歩いて7分、スペイン坂を上がった先にある渋谷パルコパート3。1Fにあるおしゃれなお店に目移りしつつも、エレベーターで8Fへ。チン！ とドアが開くと、そこはもう映画館。さっそく受付でチケットを購入。ロビー右手には、半円の形で広々としたチラシブースがあり、開場までの時間つぶしにはもってこいの場所がある。受付近くにはレトロでかわいいポップコーンの自動販売機も並び、ついつい手が出てしまいそうだ。売店には毎回上映作品にちなんだユニークな商品を販売しているので要チェック！（今回は『タナカヒロシのすべて』に出てきた「おみくじ付きクッキー」や「タナカヒロシTシャツ」が売られていた）。と、ロビーでいろいろ見ているうちに開場時間に……。

場内は黒とグレーでシンプルに統一し、清潔感漂う雰囲気。イスはキネット社製使用で、幅は広めでフカフカ。リラックスできる。平日の最終回やレイトショーしか見る事が出来ない社会人にはうれしい！ 飲食OK&全席ドリンクホルダー付き。

また、料金サービスがかなり豊富なシネクイント。入場券の半券を次回提示すれば1000円で鑑賞できる「チケットリターン・システム」や、「シネセゾン渋谷」の当日券の半券で割引してもらえる2館相互割引もあり。万年金欠気味の隊員でも、これなら渋谷で映画をハシゴ！ なんて、オツなこともできちゃいそうです。

シネクイント

座席数：227
音響：SRD・DS・SR
東京都渋谷区宇田川町14ー5
渋谷パルコ パート3・8F
渋谷駅から徒歩7分
TEL：03-3477-5905
HP：http://www.cinequinto.com/

1997年7月、もとは映画・演劇など行っていた多目的ホール「SPACE PART3」を映画専門館にリニューアルオープンした。初上映の『バッファロー'66』はロングランヒットを記録。その後も常に話題を呼ぶ映画上映を行っている。

6/25～『オープンウォーター』（2004/アメリカ/79分）公開中。※「ゴーグル」と「シュノーケル」両方を装着してきたカップルは、ふたりで2,000円で鑑賞できる割引あり！
8月・3週間限定レイトロードショー『メタリカ：真実の瞬間』、秋には『タッチ』など上映予定。

今回観た作品はコレ！

タナカヒロシのすべて 2005/日本/103分

監督：田中誠
出演：鳥肌実、ユンソナ、高橋克実、宮迫博之、市川美和子
ストーリー：かつら工場に勤務する32歳独身のタナカヒロシ（鳥肌実）は、会社で同僚や上司との付き合いが悪く、趣味もない変わり者と思われていた。しかしおみくじで大凶をひいたタナカヒロシは……。

◆平凡でどことなく昭和の香りが漂うタナカヒロシに、「コーヒールンバ」のゆる～いリズムがとってもはまっている。
人生に何も求めず平凡に生きようとする主人公を、鳥肌実が好演。ポマードを塗り軍服を着て右翼トーク……という芸風とは打って変わって、だ。そしてやたらとモテる。男前だがどうも頼りない佇まいが母性本能をくすぐるのだ。「あぁわかる」と、自分もタナカヒロシに惚れた女の一人となって、すっかり魅せられてしまった。
1時間あまり、タナカヒロシと一緒に、仕方なくした愛想笑いやぎこちない会話などを妙に生々しく体験したような気分になる。だからこそ、一念発起して一歩踏み出すラストシーンでは、主人公の前進を見届ける事が出来たと、勝手に達成感を感じてほっと一息つき、満足しているのに気づいてとても愛しくなった。そんな感覚が味わえる映画だった。（お）

「シネクイント」支配人 斉藤智徳氏 インタビュー

ミニシアター激戦区・渋谷。この街の流行発信の拠点「渋谷パルコ」のブランドを味方につけ、多くの話題作の上映や、社会現象まで巻き起こしたイベントを世に出し、いつも私たち観客を楽しませてくれるミニシアター「シネクイント」。そんな劇場で、立ち上げ当初から支配人をつとめている斉藤智徳氏にお話を聞いた。

■シネクイントの名物企画「女の子限定　日活ロマンポルノ講座」は、ロマンポルノの脚本家もされていた支配人の発案ということですが。

「始めはどうかなと思ったんですがね、立ち見が出るほどの盛況でした。最近では、去年の9月に行いましたが、これも満席になりました。リピーターも多くて、マスコミ関係の女性観客が非常に多いようです、でもほんとに普通の女性がいらっしゃいますよ。

女性限定という形で需要があるのでしょう。男性の中で女性が観るには抵抗があるでしょうし、痴漢もでるしね。女性が観ることで映画自体の価値が出てくるのではないかと思っています。

最近は、あまり出来ないのですが……、それなりの人気シリーズになっているので、またやりたいなと思いますね。

描くテーマとして、エロティックなものって大事な要素だと思うので、それを一部のマニアだけでなく、啓蒙の精神をもって広めていきたいですね。」

■話題作やポルノ特集などの企画上映で、若者たち特に女性の心をつかんでますよね。その秘訣はありますか？

「女性ターゲットということを考えると、ポルノ特集にしても、やはり生々しいエロスは敬遠されてしまいますよね。"かわいい"とか、何かオブラートに包むことが重要なのではないかと思います。「ホラーだけど"かわいい"」、「エッチだけど"かわいい"」とか。"かわいい"という括りが、商品に手を出すキッカケになるんじゃないかな。そういった"かわいい"コーディネートをするセンスが求められているのだと思います。

また、渋谷は着飾って出向くハレの場なので、デートコースの一環で来るお客様を惹き付ける魅力が必要です。"かわいい"という装置はそういった魅力になるし、パルコ的とも言えると思います。

いま公開している『タナカヒロシのすべて』も、ビジュアル面で"かわいく"宣伝しました。例えば、ポスターも女性ウケするようにね。主演の鳥肌実さんも"キモかわいい"と受け入れられているようで、カップルや女性の動員が多かったです。」

■支配人自らが企画や上映に関してとても関わってらっしゃいますよね。

「作品選定をして企画するのは楽しいですよね～。映画って自分で作るのも楽しいけど、名作など綺羅星のごとく揃ってるから、それを選んで企画するのは有意義というか……人生の醍醐味ですよね。

やはりパルコは女性が主体。女性が見て納得できるものを提供していきたい。そういう映画をパルコブランドとして打ち出せるように、宣伝などで作品をサポートするスタイルを保ちつつ、今後はさらに、作品の立ち上げから宣伝まで積極的に関わって行きたいですね。そして成功に導きたいです。やはり映画ありきですから、うちの利点を利用していかに映画を良くするか、考えていきたいですね。」

物腰柔らかに、目を細めて優しく語る斉藤氏。なんと「パルテノン多摩」に以前勤務していたことがあるらしく、我々は（勝手ながら）親近感を抱いていたのだった。「今もシナリオ執筆はされてるのですか？」の質問に、少し照れ気味に「こっそりね（笑）」と答えてくれた。斉藤氏の作品をいつの日か、「ロマンポルノ特集」でお目にかかれることを願ってやまない。（聞き手：黒川由美子）